二〇二四年度
群馬県立女子大学　文学部　文化情報学科
学校推薦型選抜　試験問題

小論文

試験時間は、九十分です。中途退室は認めません。途中で気分が悪くなった場合は、黙って手をあげてください。

問題用紙は八枚です。他に下書き用の白紙が二枚入っています。

解答用紙は二枚あります。それぞれが配られたら、指示に従って解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入してください。

試験開始の合図があるまで表紙をめくって問題を見てはいけません。

解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待ってください。

以下の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

【問い】

傍線部「誕生日とは、そういうことだったのである」とはどういうことか、本文に即して述べなさい（一〇〇〇字以内）。

手のひらのスイッチ

誕生日をお祝いする、ということの意味が、ながいことわからなかったが、やっと最近になって理解できるようになった。ずっと、どうして「ただその日に生まれただけ」で、おめでとうを言ったり言われたりしないといけないのか、判然としなかったのだけれども、その日だけは私たちは、何も成し遂げてなくても、祝福されることができる。誕生日は、一年にいちど、かならず全員に回ってくる。何もしないでその日を迎えただけなのに、それでもおめでとうと言ってもらえる。誕生日とは、そういうことだったのである。

よく聞く話だが、夫が浮気をしていて、それが妻だけでなく子どもたちにもバレて、家族関係が最悪になる。子どもたちは大きくなって家から出ていき、そこに夫と妻だけが残される。先日、直接の知り合いではないが、またそういう話を聞いた。そのときに私たちが話したのは、子育てが終わって子どもたちが出ていった後に、またふたたび夫婦ふたりきりになって、そしてそういう状態のままそのあと何十年も一緒に暮らせるだろうか、ということだった。

ふつうに考えれば、離婚したほうが良いに決まっている。しかし妻のほうは、ながいこと専業主婦をしていて、アルバイトやパート以外で、外で働いた経験がほとんどない。だ

から、夫の収入に頼らざるをえない。この社会はいつも、女性のほうが選択肢が少ないようにできていると思う。

こういう話ばかり聞くから、やっぱり学生たちにも、女性でもひとりで暮らしていけるだけの、最低限の収入は確保しといたほうがいいよ、と言う。だが、私の授業が下手なせいもあるだろうが、なかなか全員には伝わらない。いまだに、キラキラした結婚式や、家族の愛にかこまれた専業主婦のイメージは、とても強い。

女性でも男性でも、心身などに事情がないかぎり、ひとり分の食い扶持は確保しておいたほうがよいということは、ある程度の年齢になれば、政治的立場にかかわらず多くのひとが常識として捉えることだと思う。しかし、こういう、人生に起こりうる何かのリスクを考える、ということは、私たちが持っている「幸せ」のイメージからはほど遠い。だからなにか、社会学というもの自体が、世の中の辛いことや悲しいことばかり言って、自分たちを一人ひとりバラバラにするものだと誤解するひとがいる。

私たちが持っている、そうした幸せのイメージは、ときとして、いろいろなかたちで、それが得られない人びとへの暴力になる。たとえば、それを信じたせいで、そこから道が外れてしまったときには、もう対処できないほど手遅れになっていることがある。

しかし、それとはまた別に、もっと単純に、そうしたイメージ自体がひとを傷つけることがある。

すこし前に、東京のある有名なファッションビルのテレビコマーシャルが叩かれたことがあった。ひとりの女性が、会社の先輩の男性から、その地味な身なりをからかわれる。その男性は、髪型も服ももっときれいにしている別の女性社員のことを、これみよがしにかわいいかわいいと褒める。

そのコマーシャルでは、驚いたことに、そういうことを言われた女性が「私がさぼってたんだ。もっとがんばってきれいにならなくちゃ」とつぶやくところで終わる。

さすがにこのコマーシャルはひどすぎて、すぐに作った側が謝罪して撤回することになった。これは明らかに単なるセクハラだが、それでも私たちは、ここまでではなくても、

家族や結婚はこうあるべき、女性や男性はこうあるべきだと思い込んでいて、それが私たちをがんじがらめに縛る鎖になっている。

そして、そこから外れたひと、あるいは「外れたと思い込まされたひと」は、自分が悪いのではないか、自分はもう幸せにはなれないのではないかと感じる。

子ども、というものは、この社会ではもっともわかりやすく強力な幸せのシンボルである。また、結婚すれば「できて当然」のものだと考えられている。

しかし、たとえば子どもの写真がプリントされている年賀状を出してくるような友だちとは、やっぱり徐々に疎遠になってしまう。もちろん、仲の良い友だちが妊娠・出産すれば心から祝福する。しかしそれでも、そのうち自然と話が合わなくなり、なんとなく付き合いづらくなってしまう、ということはある。特にそれを妬(ねた)んだり僻(ひが)んだりしていなくても、ただ「自然と」疎遠になっていくことで、ああ私たちはそういう、世の中の幸せというものから「自然に」遠ざけられていくんだな、と実感する。

実際に私は、子育ての苦労とか、ＰＴＡのお付き合いとか、そういう一切のことをまったく知らないまま生きているので、もし友だちとみんなで話してそういう会話になったら、もう黙り込むしかない。

それにしても、妬みや僻みの感情はないけれども、ひとはしばしば、ほんとうにしょっちゅう、「お子さんは？」という質問を口にする。別にそういうときでも、普通に「あ、ウチいないんです」と答えることはできるが。それから、ほかに、「うるさい子どもがいなくてうらやましい」とか、「夫婦仲が良いからいいですね」とか、そういうこともよく言われる。

とにかく、そういうわけで、幸せのイメージというものは、私たちを縛る鎖のようになるときがある。同性愛のひと、シングルのひと、子どもができないひとなど、家族や結婚に関してだけでもこれだけいろいろな生き方がある。それだけではなく、働き方や趣味の

ありかたなど、生きていくうえで私たちがしているありとあらゆることについて、なにか「良いもの」と「良くないもの」が決められ、区別されている。

ここから、考え方がいくつかに分かれる。おそらく、そのなかでもっとも正しいのは、極端にいえば「良い」と思うことをやめてしまうこと、あるいは、そこまでいかなくても、それが「一般的に良いものである」という語り方をやめてしまうことだろう。

ある人が良いと思っていることが、また別のある人びとにとっては暴力として働いてしまうのはなぜかというと、それが語られるとき、徹底的に個人的な、「〈私は〉これが良いと思う」という語り方ではなく、「それは良いものだ。なぜなら、それは〈一般的に〉良いとされているからだ」という語り方になっているからだ。

完全に個人的な、私だけの「良いもの」は、誰を傷つけることもない。そこにはもとから私以外の存在が一切含まれていないので、誰を排除することもない。しかし、「一般的に良いとされているもの」は、そこに含まれる人びとと、そこに含まれない人びとの区別を、自動的につくり出してしまう。

「私は、この色の石が好きだ」という語りは、そこに誰も含まれていないから、誰のことも排除しない。しかし、「この色の石を持っているひとは、幸せだ」という語りは、その石を持っているひとと、持っていないひととの区別を生み出す。つまりここには、幸せなひとと、不幸せなひとが現れてしまう。

したがって、まず私たちがすべきことは、良いものについてのすべての語りを、「私は」という主語から始めるということになる。あるいは、なにかの色の石を持っているかどうか、ということと、幸せかどうか、ということとを、切り離して考えること。

私たちが、ある男性と女性が結婚したという、そのことを祝福する、ということは、こういうことだ。私たちは、好きな異性と結ばれることが幸せだと思っていて、そして目の前に、そうして結ばれた二人がいる。この二人は幸せである。だから祝福する。

つまり、ここでは、好きな異性と結ばれることは、その当人たちにとってだけではなく、世間一般にそれは幸せなことである、という考え方が前提になっている。この考え方、語り方、祝福のやり方は、同時に、好きな異性と結ばれていない人びとは、不幸せであるか、あるいは少なくとも、この二人ほど幸せではない、という意味を、必然的に持ってしまう。

そうすると、ある二人の結婚を祝う、ということそのものが、たとえば単身者や同性愛者たちにとっては、呪いになるのである。

ここで私たちが「正しく」あるためには、そもそも愛する異性と一緒になるという慣習をやめてしまうか、あるいは少なくとも、それを祝うということをやめてしまうほかない。そうなれば、もう誰も傷つくことはない。

要するに、良いものと悪いものとを分ける規範を、すべて捨てる、ということだ。規範というものは、かならずそこから排除される人びとを生み出してしまうからである。

しかし同時に、私たちの小さな、断片的な人生の、ささやかな幸せというものは、そうした規範、あるいは「良いもの」でできている。私たちには、この小さな良いものをすべて手放すことは、とてもとても難しい。

私と連れあいは無意味な儀式が嫌いで、だから結婚したときも結婚式も何もしていないのだが、たとえば学生や卒業生のなかの、かなりの割合の若い女性が、結婚式に対する素朴なあこがれを持っていることに驚く。飲み会の席でもよくそういう話になる。

なぜそんなに結婚式がしたいの、と何度も聞くのだが、あまりよく理解できたことがない。しかし、なんとなく、その日だけはきれいなドレスを着て、みんなからきれいだね、おめでとうと祝福されたいのだな、ということはわかる。

私たちは普段、努力してなにかを成し遂げたことに対してはほめられたり、認められたりするが、ただそこに存在しているだけで、おめでとう、よかったね、きれいだよと言ってもらえることはめったにない。だから、そういう日が、人生のなかで、たとえ一日だけでもあれば、それで私たちは生きていけるのだ。

実際に、卒業生の結婚式によく招待されるけれども、新郎も新婦も、とても美しく、晴れやかで、祝福を受けるに値する。私は心からおめでとうと言う。

そうした幸せというものは、はじめに書いたとおり、そこから排除される人びとを生み出す、という意味で、それは同時に暴力でもある。私は友人や卒業生の結婚式に行くことが楽しみだし、実際に心から祝福するけれども、それでも他の来賓が挨拶で「一日もはや

く元気な赤ちゃんを」とか「子宝にめぐまれますように」と言うのを聞くと、とても複雑な気分になる。

ここのところで私はいつも、ほんとうに、言葉が出なくなる。幸せが暴力をともなうものだとして、それでは私たちは、それを捨ててしまうべきなのか。極端な話、ヘテロセクシュアル（異性愛）の人びとが結婚式をあげるということは、それだけで、同性愛の人びとに対する抑圧になりうる。私たちはそういうものを、どうすれば祝福できるだろうか。

しかしまた同時に、こういうこともある。先日も飲み会の席で卒業生の女性が、彼氏の収入が低すぎて結婚できないと言って泣き出した。私はそのときに、素朴に、別に結婚式なんかしなくていいんじゃないかと思ったけれども、それでも純粋にそういうものに憧れて、そういう幸せを得たいと思っているこの目の前の女性に対して、そういうことは言えなかった。それは彼女にとっては、とてもとても大切なものなのだ。

私も、不妊治療をしていて辛いときに、子どもだけが人生じゃないよとか、そういうきれいごとを言われることがもっとも不愉快だった。

たとえば、女性は若くきれいにかわいくしているべきである、という、ありきたりな規範がある。それは私たちを縛り付ける鎖であり、たくさんの人びとを排除する暴力である。しかし、たとえば女性が身ぎれいにすること自体を、暴力に等しいものとして否定することは、なかなか難しい。

ここで、ひとつの考え方がある。それは、「さまざまな価値観を尊重しましょう」というものだ。だから、おしゃれをしたりメークをしたりすること自体が悪いことなのではなくて、それを他者から、あるいは社会全体から強制されてしまうことを否定しましょう、ということである。たとえば無神経な上司から外見をからかわれたことを気にしておしゃれをする、ということは、いかにも屈辱的なことなのだが、自分なりの個性的な価値観と信念に基づいておしゃれをすることは、何も悪いことではない、ということになる。

だが、私はここから本当にわからなくなる。私たちは「実際に」どれぐらい個性的であるだろうか。私たちは本当に、社会的に共有された規範の暴力をすべてはねのけることができるほどのしっかりした「自分」というものを持っているだろうか。

むしろ私たちは、それほど個性的な服を着ることよりも、普通にきれいでかわいい服を

着て、普通にきれいでかわいいねとみんなから言われたいのではないだろうか。個性的である、ということは、孤独なことだ。私たちはその孤独に耐えることができるだろうか。

そもそも幸せというものは、もっとありきたりな、つまらないものなのではないだろうか。

子どものときに、いつも手のひらのなかに見えないスイッチを握っていた。なにか困ったことがあると、空想のなかで「カチッ」とそのスイッチを押せば、すべてうまくいく、ということをずっと想像していた。小学生ぐらいまでだろうか、けっこう大きくなるまで、無意識のうちにいつもスイッチを手に持っていたと思う。

スイッチを押したくなることはたくさんあったが、なかでももっとも私の頭のなかを占拠していたのは、外見に関する劣等感だった。私は自分の外見が大嫌いだったのだ。

私はとにかく見た目の悪さに真剣に引け目を感じていた。外見だけでなく、いまでもそうだが、子どものときも体の動きが極端にぎこちなくて、スポーツ、特に球技がまったくダメで、そういうところでも強い劣等感を持っていた。それでもまったくモテなかったわけではないが、他人からどう評価されるかとは別に、とにかく私はもっとかっこいい見た目に生まれたかった。小学生ぐらいのときはそればかり考えていた。

思い返すと、ほんとうにくだらない、つまらないことで悩んでいたのだなと思う。しかしこの歳になってもまだ、ときおり想像をしてしまう。美しく、幸せで、何も欠けるところのない、完全な人生を送っている自分を。人から称賛され、平穏で、なんの落ち度もない人生を。家族に囲まれた、幸せな人生を。

いま現実にそうであるように、毎日を無事に暮らしているだけでも、それはかなり幸せな人生といえるのだが、それでも私たちの人生は、欠けたところばかり、折り合いのつかないことばかりだ。それはざらざらしていて、痛みや苦しみに満ちていて、子どものときに思っていたものよりもはるかに小さく、狭く、断片的である。

何もしてないのに「かわいい」「かっこいい」「おめでとう」「よかったね」、そして「愛してる」と言われることは、私たちからもっとも遠くにある、そして私たちにとってもっ

とも大切な、はかない夢である――そしてそれが同時に、ほかの人びとを傷つけてしまうこともある。だから私は、ほんとうにどうしていいかわからない。

岸政彦著『断片的なものの社会学』（朝日出版社、二〇一五年）